

桜蔭俳話会 七月句会(第二九七回) 桜蔭会館

平成二十三年七月二十四日

5点②バス灼くる次ぎは靖国神社前 貞勝

3点①控へめの扇子の風や琵琶響く 友子

3点 所作の美(は)し涼のあつまる能舞台 幸

2点 ウインドの値札に外すサングラス 貞勝

片陰を拾ひ老猫去りにけり 秀一

流木のひとつは墓標青胡桃 守

梅雨明や父の見まねの包丁研ぎ 友子

炎天の被爆表土の深さかな 守

1点①鳥もちの匂ひ懐かし群蜻蛉 秀一

①昼寝より覚めて筆とる遺言書 守

①ふはと脱ぐ喪服は重く蛍の火 幸

①夕焼に竹藪暗く沈みゆく 眞三

1点 悩み事のひとつ解けたり星涼し 友子

総展帆海の男のアイアイサー 佳史

ビル白し斜めによぎる夏鳥 眞三

炎昼の大樹影濃し変りゆく

眞三

麦酒のむ採血あとの絆創膏

秀一

夏蝶の不意に現れ風と消ゆ

ヤエ子

煉瓦倉庫は港の意気地雲の峰

貞勝

梅雨空を雲大艦隊のごとくゆく

佳史

虫干や和服の似合ふ母なりき

友子

電線の影一直線に燃えにけり

ヤエ子

※

観客は白足袋持ちて能舞台

幸

動かざる木影の模様大暑かな

眞三

跨湾橋ハープ透かして雲の峰

貞勝

飯饘えし臭ひかすかに中華街

守

刈られたる草の匂ひや夏のれん

ヤエ子

沖縄のその名も悲し終戦忌

佳史

熱き夜や猫鎮座する道真中

ヤエ子

もてなしは川島の風夏座敷

幸

山間の瀬静かなり岩魚影

幸

桑の実落つ朱の散乱となりにけり 佳史

サングラス見詰められたる顔の向き 秀一

野球子の大き水筒雲の峰 友子

雲形の定規をさがし雲の峰 貞勝

雷の響き渡りて落ちし音 眞三

道ふさぐ櫂の枝や夏嵐 ヤエ子

夕蟬やみなどみらいの風の中 守

草の池狭くなりたる晩夏かな 秀一

日本に「終戦」ありき炎暑の日 佳史

不在投句 (野上貞勝)

(事務局より)

夏季通信句会を実施します。

句数は夏に属する季語を用いた三句です。

同封の葉書で、八月十日までにお送りください。